

## 主の晩餐：ルター派の聖餐理解と実践

正木牧人

### 序

福音主義神学誌で福音主義諸教会の聖餐論を取り上げるのには、東部部会と西部部会の今春の研究会で本年聖餐論を取り上げたことに由来する。筆者は西部部会で社会学的、宣教学的な聖餐理解と今日の日本の教会への適応の提案を発表された三好明久氏論文への応答者の一人として発表を任じられた。その興味深い方法論と適応例をこれまでの教理的理解との相違を根拠に急いで一喝するのではなく、むしろ教理的な信仰告白に堅く立った上で日本の教会の教会形成の文脈の中で聖餐の真の意味の理解が進み、聖餐にあずかる喜びを取り戻す機会とできないかを考察した。

本稿では部会研究会の内容を繰り返したり、深めたりするのではなく、むしろ聖餐論一般についてルター派の立場から論ずるようにとの指示を受けている。しかしその取り扱いについては各執筆者に一任されている。そこで「ルターの小教理問答」の枠組みに沿いながら、聖壇の礼典、主の食卓などの名前でも呼ばれている聖餐について、おおまかな理解と実践を紹介していくことにしたい<sup>1</sup>。

ルターの小教理問答は、信仰教育の教材である。これまでルター派教会で長く広く用いられてきた。マルティン・ルターは早くから教会で二週間連続の入門説教を年に四回繰り返して行い、親たちが子どもを出席させるように求めている。また小さなパンフレットを用意して教材として用いていた。しかし、1528

<sup>1</sup> マルティン・ルター、小教理問答：一般の牧師、説教者のためのマルティン・ルター博士の手引き、「一致信条書」聖文舎、1982年、479-523頁

年と29年にザクセンやその他の地方の教会巡察を行った際、主の祈りや使徒信条をやっと言える程度の牧師たち、全く信仰教育のなされていない無知な信徒たち、何年も聖餐が行われていないなどの働き人と信徒の信仰の実態を目の当たりにして、ルターはこのような教会の危機的な実情を踏まえた小教理問答を著したのである。まず、十戒、信条、主の祈り、食前と食後の祈り、朝夕の祈り、洗礼、聖餐という、七枚のポスターのかたちで発表し、さらに序言と義務表を前後に加えて1529年5月に初版小冊子を出版した。

ルターの小教理問答は、問答形式で書かれており、聖書のおしえとその実践が非常に簡潔に教えられている。「聖壇の礼典」とされる聖餐の項目は、五対の質問と答えによって構成されている。まず「聖壇の礼典とは何ですか」という問いによって聖餐の定義を明らかにし、「それはどこにしているのですか」という問いで聖書の根拠を述べる。更に、「このような飲食が、どんな役に立ちますか」、「肉体的な飲食が、いかにしてそのような大きなことをすることができるのですか」と問い、キリスト者として聖餐にあずかる利益とそれを与える神の設定の御旨を学び、最後に「どのような人が、この聖礼典にあずかるにふさわしいのですか」という問いで聖餐にあずかる実践面が教えられる。

小教理問答は子どもが学ぶことのできるように牧師や両親が用いる教材として書かれているが、その内容は平易でありながら決して初歩的な教えにとどまっているのではなく、むしろルター派の聖餐についての教えが、この小教理問答にすべて述べられていると言える。ここではこの五つの問いと答えの枠組みを用いて、議論を深めていきたい。

### 第一：聖壇の礼典とは何ですか。

問い：聖壇の礼典とは何ですか。

答え：それは、われわれの主イエス・キリストの、まことの肉、まことの血であって、われわれキリスト者が、パンとぶどう酒と共に食し、飲むようにと、キリストご自身によって設定されたものです。

以上がルターの小教理問答において、聖餐の第一の問答である。聖餐がキリストのまことの肉、まことの血であること、また、キリスト者がパンとぶどう酒と共に食し飲むこと、それはキリストが設定されたこと、という内容である。

聖餐がキリストのまことの肉、まことの血であるという信仰告白は、歴史的に非常に重要な理解である。ルターはもともと別の教会をつくるつもりはなかった。聖餐論を語る時も、それは戦いのためではなく、聖書の御言葉に基づく真の一致した交わりのためのことであつた。ローマ・カトリック教会で聖餐が誤用されてきた歴史があつても、だからといって聖餐が失われていたというのではない。のちに改革派教会からルーテル教会にはローマ・カトリック教会の影響が残っているという批判を招いても、聖餐論は聖書を土台にして語ることに終始している。

1530年にカール五世の前で告白されたアウグスブルク信仰告白の第十条には「キリストのからだと血とは、主の晩餐において、真に現在し、それを食する人々に分与される。そしてわれわれ諸教会は、これと異なることを教える人々を是認しない」と記されている。しかし、これをフィリップ・メランヒトンが1540年に「主の晩餐において食する人々にパンとぶどう酒と共にキリストのからだと血は真実に示される (exhibeantur)」と変更し、これにはカルヴァンも署名している。ルーテル教会は1540年版を「改訂されたアウグスブルク信仰告白 (Confessio Augustana Variata)」と呼び、「改訂されないアウグスブルク信仰告白 (Unaltered Augusburg Confession)」を自身の信仰告白として採用してきた。

聖餐において、キリスト者はキリストのまことのからだとまことの血をいただく。キリストの聖餐の設定辞の約束のまま、パンとぶどう酒においてまことの血、まことのからだをいただくという約束に立つ。この点で教皇派、すなわちローマ・カトリック教会と、聖餐形式論者、すなわち改訂されたアウグスブルク信仰告白の名の下に教会に入り込んできている者などの立場を両者とも明確に斥ける。ローマ・カトリック教会は聖餐はキリストのからだと血であるというがそれはもはやパンとぶどう酒ではないとし、聖餐形式論者は聖餐のパンとぶどう酒がキリストのからだと血そのものではなくそれをあらわすもの、保証するものとする。そうではなく、聖餐において私たちがパンとぶどう酒をいただくとき、それは設定辞の御言葉によってキリストのまことのからだと血をい

ただいているのである。一致信条書の中で、ローマ・カトリック教会の三つの誤謬、聖餐形式論者の十四の誤謬が斥けられ非難されている。

ローマ・カトリック教会の聖餐論について、大きくわけて、聖餐の実質変化の教理、生者と死者のための犠牲のミサというような聖餐の誤用、そして第三に、信徒にパンのみを与える一種陪餐に反論する<sup>2</sup>。ここでルーテル教会は化体説と呼ばれる聖餐の実質変化の教えを退けていることに注目したい。化体説は、聖餐において聖別されたパンとぶどう酒はキリストのからだと血の実質に変えられる、とする立場である。パンとぶどう酒は、その実質と本質を失い、トマス・アキナスの言葉では「偶有性 (accident)」のみを残すという教えである<sup>3</sup>。ローマ・カトリック教会では聖餐のパンはパンというものの形のもとにはあるがそれはもはやパンなのではなく、聖なるキリストのからだなのである。すなわち、聖別後にパンとぶどう酒の実質が残るとする立場は斥けられている。聖別後はキリストのからだなのであるから、聖餐の行為以外のときにも保管したり、見せたり、拝したりしていた。ローマ・カトリック教会の対抗改革の会議であるトリエント公会議における聖餐に関するセッション (1551年セッション十三) では「キリストのからだと血はパンとぶどう酒の外見(sub speciebus)のもとに聖餐に封じ込められている」と第四ラテラン公会議 (1215年) の決定を再確認した。ルターは理解では、たしかに聖餐のパンはキリストのからだであるが、キリストのからだに「成る」のではない。

また、ルターはローマ・カトリック教会の聖餐を犠牲とする理解をも斥けている。そこでは、聖餐はキリストのなだめの犠牲とされる。父なる神と私たちの和解のためにご自身を血を流した犠牲として一度おささげになった同じキリストが、司祭によって聖壇の上で毎日みえるかたちで無血の犠牲としてささげられるという。ここで聖餐をささげるのは厳密には司祭ではなくキリストご自身であるとされる。聖餐の犠牲は十字架上で犠牲とはあり方は違うが、それを現在のものとして表示する (repraesentetur) ものであり、これによって救いの力が適応されるという。トリエント公会議のカテキズム (Catechismus

<sup>2</sup> 和協信条根本宣言第七条 107 以下

<sup>3</sup> トマス・アキナス「神学大全」III、質問 75, 4-5 項

Romanus, 1566) によると、無血の犠牲は十字架の犠牲と同一のものであり、人々はそれによって十字架の犠牲の実を受け取る、とされる。ルターはこのような犠牲の聖餐論を受け入れない。

聖餐形式論者に対してはどうであろうか。聖餐形式論者には様々な立場のものが含まれる。聖餐を外的なしるしに過ぎないと考える者、聖餐にキリストが真に現在すると告白するが神性によってだけのことと考える者、至る所にあるキリストの霊が地上の我々を天にあるキリストのからだと霊的に信仰によって結合すると理解する者などである。様々な立場ではあるが彼らに共通しているのは、聖別されたパンとぶどう酒をキリストのからだと血とは信じていない、という点である。彼らの中にはアウグスブルク信仰告白に近い言葉遣いを用いようと努めて、聖餐においてキリストのからだと血が真実に信仰者によって受け取られる、と告白する者もいる。しかしそのキリストの真のからだと血は、天が地から離れているように聖別されたパンとぶどう酒からはるか遠くに離れているとも告白する。つまり、キリストのからだの現在を、この地上のことではなく信仰に関してのことと理解する。これはキリストご自身による聖餐の設定辞を、語られたとおりの意味で率直に受け取るのではなく、転喻、もしくは象徴的解釈によって、別の、新しい、異なった理解へと導くものであり、多種多様な告白にわかれているが、ルターはそれらすべてを斥ける。

カルヴァンが、共在説のルターと象徴説のツヴィングリの中間の立場を取る調停者とされることが多いが、ルーテル教会においてはローマ・カトリック教会と聖餐形式論者が両側の極端とされ、どちらのみぞにも落ち込まないように警戒する。このとき、リアル・プレゼンスという言葉で欺かれないように注意が必要である。キリストが聖餐に現在する、というリアル・プレゼンスという言葉は、たとえば 1541 年のレーゲンスブルク宗教会議ではローマ・カトリック教会、ルーテル教会、聖餐形式論者の三者とも、この言葉をもって自説を展開できた。それぞれの立場がリアル・プレゼンスという言葉に託する意味合いが違うのである。ルターはキリストが設定辞に言われているとおりの「真に現在する truly present」という表現を好んで用いる。

ローマ・カトリック教会はキリストのからだと血がそこに現在するとしながらも聖餐が与える賜物について正しく教えていないが、聖餐形式論者はキリス

トのからだと血の現在について正しく教えていない。たとえば聖餐におけるキリストのからだの現在をキリストのからだなる教会に置き換えて理解するカールシュタットの聖餐論についてルターは、「彼は恵みの手段をキリストの苦しみの黙想に変えてしまった。教皇派と同様、彼は聖礼典を人間のわざにしまった」と評した<sup>4</sup>。それは聖餐の利益を聖餐そのものと取り違えていることである。しかし聖餐は、キリストを犠牲としてささげるというわざや、キリストの苦しみを黙想するというわざではない。ルターは聖餐を神が私たちに恵みを与える機会と理解する。聖餐は人のわざではない。聖餐は、キリストご自身が制定し、キリスト者が「取って食しなさい」、「みなこの杯から飲みなさい」と言われたパンとぶどう酒と共に食し飲む、イエス・キリストのまことの肉、まことの血なのである。

## 第二：それはどこにしろされていますか。

問：それはどこにしろされていますか。

答：聖なる福音書記者マタイ、マルコ、ルカ、そして聖パウロが次のように書いています。「われわれの主イエス・キリストは、渡される夜、パンをとり、感謝してこれをさき、弟子たちに与えて言われた。取って食しなさい。これはあなたがたのために与える私のからだである。私の記念として、これを行いなさい。食事ののち同じようにして杯をとり、言われた。みなこの杯から飲みなさい。これは罪のゆるしを得させるようにと、多くの人のために流す、私の血による新しい契約である。飲むたびに、私の記念として、これを行いなさい。」

これが小教理問答の聖餐の第二の問答である。聖餐のおしえのすべては、キリストがこの聖礼典を制定なさった御言葉である設定辞に基づいてなされる。聖餐は人間の工夫による産物ではない。設定辞によって聖別されたパンとぶどう酒において私たちはパンとぶどう酒と共に口でイエス・キリストのからだと

<sup>4</sup> Luther Works 40 : 146-148

血をいただく。御言葉がつくりだす信仰によっていただくとき罪の赦しをいただく。

人々は宗教改革の教会においてはじめて実際に理解できることばで聖餐の設定辞を聞いた。それまではローマ・カトリック教会の神父たちは低い小さな声で会衆のききとれないように設定辞を語った。

まず、ルター派の聖餐論は、キリストの設定辞を土台にしていることに注目する。キリストの語られたことであるので理性的にできなくともその通りに受け取る、という態度がそこに見られる。聖餐においてキリストのまことのからだとまことの血をいただくことは、「神の聖なる御言葉である設定辞による真理の唯一で、確かな、動くことのない、疑う余地のない岩の上に基礎をおいており、聖なる福音書記者や使徒たち、その弟子や聴き手によってそう理解され、教えられ、伝達されている」という確信に基づいている。大教理問答の聖餐の箇所、ルターはこう説教する。「聖餐におけるパンとぶどう酒は日常の食卓で提供されるただのパンとぶどう酒ではなく、神の御言葉に包まれ、御言葉に結び付けられたパンとぶどう酒である。御言葉こそ（と私は言う）、これを聖礼典とならせるものであり、この聖礼典がただのパンとぶどう酒ではなくキリストのからだと血であることを識別させるものである。」<sup>5</sup> この御言葉は一君侯や一帝王の言葉ではなく、すべての被造物が跪く至高の神のものである。この少しあとでルターは印象的な次のような解説をする。「たとえ十萬の悪魔がすべての狂信者たちを引き連れて『どうしてパンとぶどう酒がキリストのからだと血でありうるのか』と詰め寄っても・・・ここにはキリストの言葉が厳存する。・・・実際御言葉を取り去り、あるいは御言葉なしでこれを見るならば、手にあるものはただのパンとぶどう酒にすぎない。けれどもパンとぶどう酒があるべき通りに御言葉のもとにとどまるならば、その御言葉の力によって、それは真実のキリストのからだであり、血である。・・・キリストの口が語り話されたその通りになるのである。」

ルターの、キリストの御言葉への信頼は厚い。私たちはパンとぶどう酒がどのようにしてキリストのからだと血でありうるか、理性と一致するか、可能か、

<sup>5</sup> 大教理問答第五部9以下